

コロナ禍以降、今の「不登校」の対応

コロナ禍で学校が休校、自宅学習になり、勉強する子としない子の二極分化がはっきりしてきた。何となく不安で不登校になり、学校を行き渋っていた子ども達も、休むことが公認されたかのように簡単に不登校になっていく。学校行事の中止や給食の黙食などで学校での遊びや楽しみもなくなり、子どもが無気力になったり、逆にイラつくことが多くなった。

家庭では親の在宅勤務が増え、家族が密になり、特に外国人家庭での虐待も現れる。外出自粛をきっかけに子ども達はオンラインゲームやSNSにのめり込み、益々引きこもり化する。

そんな中、IT技術の普及で社会は大きく変化し、人間関係が希薄な「ポケベル・ケータイ」世代の親と「スマホ」世代の子ども達に対して、近所の遊び集団で育ち、青年団や町内会などの密な人間関係の中で暮らしてきた応談者世代。もう今までの対応は通用しない。単にスクールカウンセラーを増やせばよいという訳ではない。

「ポケベル・ケータイ」世代の親に育てられた「スマホ」世代の子ども達の心理、「キャラで話し、キャラでLINEしている」今の子ども達の心理をしっかり掴み対応することで、マニュアルはない。

「ポケベル・ケータイ」世代から「スマホ」世代と、希薄な親子関係から友達関係も益々希薄になり、「自己、アイデンティティ」が不安定になる。その防衛としてひきこもって自己愛を肥大化させる。その一方で、弱い自己を強い「キャラ」で隠し、仲間を利用して仲間をいじめたりする。

その「不安定な自己を安定した自己に回復させる」ためには、まずは子ども達に「共感する」。これは今までの対応にもある。子どもにとって親や相談した人が自分に共感してくれる、自分の存在をそのまま受け入れてくれることは、子どもの強い承認欲求が満たされ、その子の心の安定を、安定した自己を回復させる。

引きこもる子は自尊感情が低いから、その自尊感情を高めるため、子どもを褒めること。ただ褒めるだけでは不十分で、そのよい行動がお父さん、お母さんは嬉しいという気持ちを伝えることが大事。それを1日に3回以上はやって頂きたい。そうしたお父さん、お母さんの言動が子どもの自尊感情を育てる。

そして、これも不登校やひきこもりになる素因である、育っていない非認知能力、社会を生き抜く力を育てること。そのために、自然や社会の中で同世代の仲間たちと群れ集う体験をさせる。同世代の仲間たちと群れ集うことを通して、仲のよい子も初めて会う子も、年上の子や年下の子とも関わること、自然にいろんな目線や距離感で人と関わる術を身に着ける。そうした体験の場がない時は、お父さんが子どもと一緒に、父親ならではの身体を使った遊び体験をする。子どもは自分をコントロールしながら、他者からの攻撃的な行動に対処するなど、子どもの情緒的及び社会的発達により影響を与える。

また、無気力な子を生むのは、親の姿勢である。成果主義の親は、子どもが頑張ってもダメだった時に、子どもが味わう挫折感が無気力にする。子ども達を挫折体験から守る過保護

な姿勢は、結果、「挑戦しない心」無気力を強化させる。

それに対して、プロセス、過程を重視する親は、結果がうまくいかなかったとしても、一生懸命に頑張ったことで子どもが抱いた清々しさや充実感に目を向け、それを讃えることになり、その姿勢が子どもの「諦めない心」を強化させる。逆境に負けないものの見方を身につけさせるべきである。

(2021年11月10日 SBS ラジオ「ワサバイバル」に出演して)